

南十字星創刊60周年記念 会員エッセイ

The Southern Cross 60th Anniversary Member Essays

会員の皆様より「日本人会と私の思い出」をテーマにしたエッセイをご応募いただきましたので、ご紹介させていただきます。



「お雛様と娘」

先日MRTの自動改札口で、「タッチひゅー、タッチひゅーで行ってね」と言う女性の明るい声が聞こえた。見ると3、4才くらいの男の子がタッチパネルにカードを滑らせながら改札の間を走って行く。小さな子供にとって自動改札を通ることは難しいものだが、「今日は一番上手だったね」と微笑んで歩く二人の背中を見送りながら、私は心の中で「素敵な声かけだな」と呟いた。分かりやすいリズムで安全に改札を通らせ、すかさず褒める。お母さんの優しさと工夫が見える。子供たちが小さかった頃、私は何と書いていただろう？日々の忙しさに追われ、「早くはやく」、「真っ直ぐ進んで」と急かしてはいなかったのだろうか？遠く、昔の自分を振り返る。

我が家は来星して20年になる。結婚直後に夫と移住し犬を飼い、二人の子供にも恵まれた。最近、家族の写真を整理していると、娘の写真には日本人会に展示されるお雛様との写真が多いことに気がついた。夫と息子は週末ソフトボールの練習で忙しく、私と娘だけで日本人会の図書室に通うことが多かったのだが、旧正月が過ぎた頃に1階のロビーを通り雛壇があれば、嬉々として写真に残したものだ。何年分の写真が残っているのだろうか？好奇心から記録を遡る。

1才（そう、1才の頃には子供図書室にも可愛いお雛様のタペストリーがあったっけ）、2才、3才、ああ残念、4才と7才の分がない。8才、9才…12才まで！期せずして、他の10年間では全ての年の写真が残っている。

毎年少しずつ風貌を変える娘が、お雛様の前で微笑む姿。可愛かったな。あの頃はただ何気なく写真を撮っていたに過ぎなかったけれど、今振り返ると、我が家の歴史と思い出がこんなにも深く日本人会と結びついていたことに、改めて感慨を覚える。息子と娘、海外で育つ子どもたちの心に日本の魂を吹き込んでくれたのは、おせち料理を味わい、マグロの解体や夏祭りを楽しみ、ボールルームで駆け回った、日本人会でのさまざまな行事ではなかっただろうか？



写真を眺め、時の流れを感じながら、その恩恵に対する感謝の気持ちが込み上げてくる。あの頃の小さな娘が、今では背丈が並ぶほどに成長し、私たちの関係もまた変わった。

今ではラウンジで一緒にコーヒータイムを楽しみながら、ふと思う。「来年も、忘れずに写真を撮らなくちゃ」と。